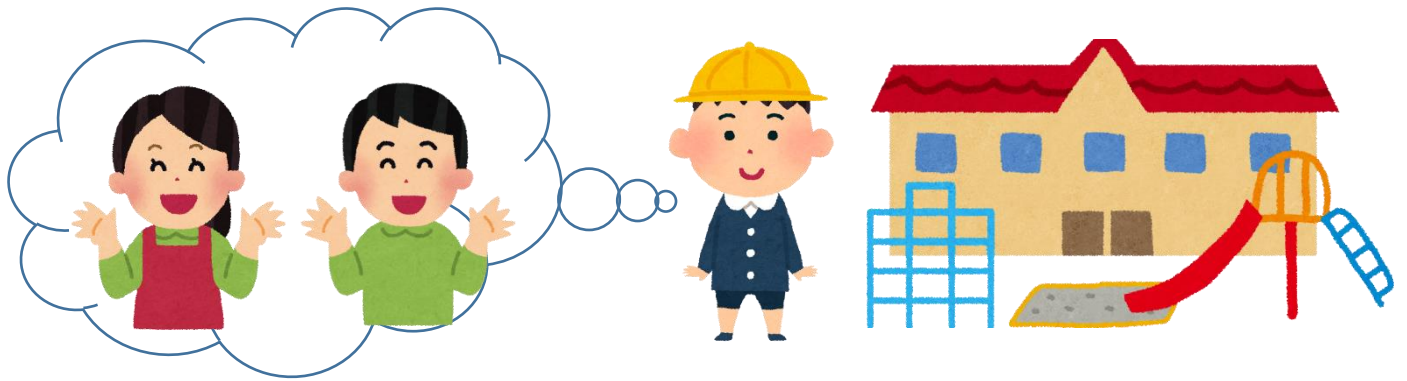


第43号も愛着をテーマにしていきます。

## 愛着（アタッチメント）について

第42号では愛着のもつ機能と愛着行動について書いていました。

乳幼児は養育者と外の世界を行ったり来たりしているうちに、徐々に養育者から離れる時間や距離が増えていきます。やがて保育園や幼稚園に出かけていけるようになっていきます。これは子どもの中に養育者のイメージが内在化されていくからだと考えられます。イメージの内在化とは、目の前にいなくても自分の心の中には受け止めてくれる養育者がいつでもいるということです。内在化によって安心して冒険ができるようになるのです。この内在化は個人差がありますが、3歳ごろまでに完成すると言われています。





### 愛着という心の基盤こそが発達のさまざまな基礎となります。



文部科学省は子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題を挙げています。乳幼児期における子どもの発達において重視するべき課題の一つに、愛着の形成があげられています。

愛着には個人差があり、ある程度パターンに分けることができます。エインズワースのストレンジ・シチュエーション法による分類が知られています。この方法は次の方法で子どもの様子を観察し、愛着パターンを分類しました。

- ① ある一室に母親と子どもを入れて、二人で遊んでもらう。
- ② 次に見知らぬ人が入り、母親に出て行ってもらう。
- ③ 再度母親が入室し、見知らぬ人は退室する。
- ④ 母親が退室し、子どもは一人で部屋に取り残される。
- ⑤ 見知らぬ人が入室し、子どもを慰める。
- ⑥ 最後に母親が入室し、見知らぬ人は退室する。

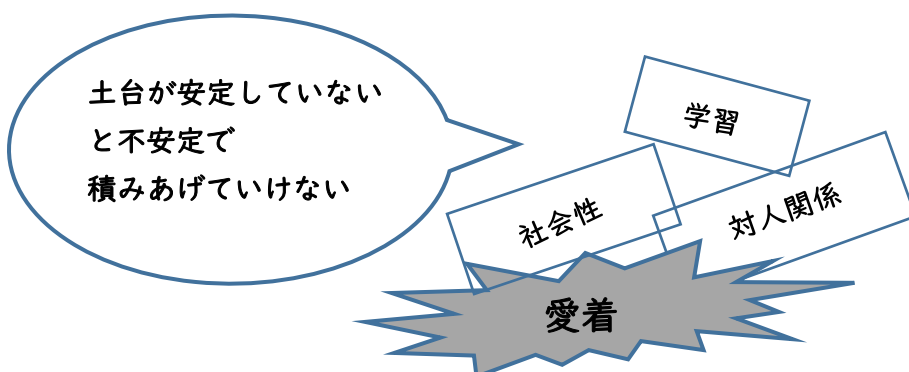
というように母親との分離と再会、見知らぬ人の存在と不在を繰り返します。

パターン	安定型 (B型)	回避型 (A型)
分離	泣いて後追いする。	不安を示さず、泣いたり後追いしたりしない。
再会	大喜びでベタベタくっついてすぐに落ち着く。	抱きつかず目をそらしたりする。
家庭での養育者の様子	子どもの出すサインに敏感に反応している。双方のやりとりができています。 	子どもの働きかけにきちんと相手をしていなかったり、子どもが泣いている時に慰めるのではなく避けたり叱ったりする傾向がある。 

パターン	アンビバレント型 (C型)	無秩序型 (D型)
分離	大泣きして、激しい不安や混乱を示す。	あっさりしていてあまり反応がない。
再会	べったりくっつくだけではなく、叩いたり攻撃したりする。	目を合わせずに顔を背けたまま養育者に近づいたりしがみついたと思うと離れたりと、養育者に対して怯えたような仕草を見せる。また、逆に見知らぬ人にはベタベタとくっつく。
家庭での養育者の様子	養育者の気分や都合で子どもと関わっていて、子どもの様子に敏感に反応することができていない傾向がある。 	子ども虐待が行われている可能性がある。 

この表で見えていくとB型が一番安定していて愛着関係を築いています。

愛着は乳幼児期において重視するべき課題であり、愛着関係が社会的な行動の土台となります。この土台（愛着）がしっかり築けていないと、対人関係や社会性の発達が安定せずに問題が生じることがあります。また、愛着形成が不十分な場合にトラウマに弱くなります。トラウマになりそうな辛い出来事があった時に、愛着形成がしっかり成されている場合は養育者や配偶者、子どもなど自分の大切な人が心に浮かび頑張ろうと思えます。



愛着障害については次のテーマ  
自閉スペクトラム症のあとに発行予定です。  
第44号は、  
(小) 山田先生担当です。